山村暮鳥全集

第二巻

初版発行　昭和三十七年七月三十日
二版発行　昭和四十八年七月十日
著者　山村暮鳥
発行者　津曲篤子
印刷者　和田和平
発行所　東京都新宿区中町十八
電話（二六〇）三七〇七
株式会社　彌生書房

0392-6208-8525

山村暮鳥全集

彌生書房刊

伊藤信吉　草野心平　土田ふじ子

編集　壺井繁治　花岡謙二　人見円吉

藤原　定　室生犀星　山室　静

山村暮鳥全集　第二巻　目次

小説……九

『十字架』……一一
『鼹鼠のうた』……一六七

随想……二一七

自然……二一九
蚯蚓……二一九
月に対して……二一九
言葉……二二〇
朝顔……二二〇
詩と理解……二二〇
ON CHINA……二二一
美のふるさとと其処の人々……二二一
道……二二二
風想草語……二二三
椿……二二三
都会には都会固有の匂ひがある……二二四
雪の夜のこと……二二四
美は何処から……二二四
海辺にて……二二四
こどもの仕事に就て……二二四
こどもは草を食べる……二二五
推移と個性……二二五
芸術に就て……二二五
感覚とそれ以上……二二五
昔と今……二二六
愛……二二六
乞食……二二六
希臘芸術に就て……二二六
夜話……二二〇
詩稟……二二〇
美……二二〇
人間……二二一
円と角……二二一
びらを見て……二二一

生活のこと……三三二
象　徴……三三三
事　実……三三三
牛の角……三三三
肉体の黎明……三三四
草の上にて……三三四
秋……三三四
FRAGMENTS……三三五
落　葉……三三五
個　性……三三五
海と自分……三三五
秋の頃……三三五
生とは斯るものか……三三六
独　語……三三六
窓……三三六
苦悩者の言葉……三三七
小川芋銭……三三九
ねを・ぽえとり……三四三
ダビデの詩……三四五
詩　僧……三四六
悲壮なる幻滅者……三四八
此の存在である……三五五
驢々馬々……三五六
山居前記……三五九
磯浜より……三六一
童話のこと……三六二
童謡に就て……三六三
童話に就て……三六七
斯く照応す……三七〇
人間の彼方へ……三七〇

書　簡……三七七

年　譜……四四九

編集後記……四六一

小

說

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

十字架

著者として

一ど書いておくつた跋が何処へかなくなつてしまつたさうだ。いまの自分には再びそれをくりかへしてかく勇気が無い。

また実際にはそんなものの必要もないのである。だからどうなつたつて、いいのである。

唯、一こと言はせてもらふとすれば、いまの自分に欲しいものは、それは山を海へ移すほどの信仰ではない、それほどの健康であるといふことだ。ただ、それだけだ。まことに健康ばかりが美でそして真理で真実であるからだ。

茨城県イソハマにて。

ここは北国の小さなあれさびた鉱山町だけれど、そして教会堂は勿論、信者もまだたつた二人しかないのだけれど、こんどアメリカがへりの伝道師がきてめづらしくもここに定住し、この附近一帯のひとびとのためにキリストの福音をのべつたへるといふことになつた。

小学校教員の高木はその知らせをうけたときからうれしさで胸を一ぱいにしてゐた。いくたび天をあふいで感謝をしたか。もうまつたく何かが手につくどころではなかつた。それは、ながらくかうしたところで無智な異教徒ばかりのあひだにあつて、謹厳な信仰をもち、嘲罵をうけ、しかもかたるにたるやうな友もない孤独な境遇で、まるで曝し物にでもなつてゐるやうな身の上のかれとしては無理もなかつた。彼は強かつた、けれど弱かつた。かれは神を信ずるがゆゑによわかつた。もしかれが神もなんにもしらないにんげんであつたら、そしてそれほどの酷い貧乏でなく、郷里にひとりの腰の曲りかけた母でももつてゐなかつたら、その体軀からいつても意志からいつても眼中それこそ何物もなかつたらう——けれどかれは弱かつた。かれは自らをしばしば苦痛の谿底にみいだしては祈つた。かれは伝道師をなによりもまづ彼をなぐさめるために神のつかはす天の使だとかたく信じ、また、それはたしかに千軍万馬以上の味方であるやうにおもつた。

授業がすむと、すぐその足で下宿にもよらないでまつすぐに町裏のとある大きな百姓家の二階をさしていそいだ。そこが仮にさだめられた伝道所であつた。きてみるとそこにはもうこれもおなじ小学校の女教員である初瀬がゐて、窓の障子をはりかへるのでばりばり紙をやぶいてゐた。

「いまですの？」女はくるりと振返つてにつこりと、どこか艶(なまめ)かしい匂ひのする声をかけた。

「ええ。これでも教案なんかそつちのけにして来たんです」

「校長さんは？」

「まだゐますとも。男の方ではわたしが一ばんはやいんです。彼奴らは灯でも点くころにならなけりやなかなか帰らうとなんかしねんでさあ。あの校長は別だが、みんな蝙蝠のやうな奴らだ」

これが、高木のいつもの口調であつた。かれはその蝙蝠のやうなといふところにことさら強く力をいれた。

「まあ」

「あ、これですか。有難う」

「二十枚ありますのよ」

「幾何です？」

「一枚二銭宛ですつて。……それを買ひによるとね、何にするんだつてきくでせう。ぴらにつかふのだつていふともうなにもかも知つてて、誰にきいたんですか、あんたも耶蘇だつてね、なんて冷かすでせう。私、耻しかつたわ」

高木はそれを鼻尖でうけた。それにはことばもかへさない

で、もつてきた新聞包から大きな筆と開明墨とをとりだした。そして首をひねつた。女は女で、またばりばりとやりはじめた。

女もなんとなしにうれしかつた。だがそのうれしさは高木のそれとは似てもつかないものであつた。まだ見たこともない先生を、そつと眼のまへにたたせてみた。それには顔がなかつた。で、いろいろの見知つてゐる顔をたくさんひつぱりだしてきてあれかこれかとくらべたり、あて篏めたりして見た。それでもなく、これでもなかつた。それらはみんなあまりに見馴れすぎた平凡な醜いまぬけたものばかりであつた。これといふ理想的なのは一つもなかつた。初瀬はなんとしても自分の知つてゐる範囲ではそれらしいのすらみつけることができなかつた。そんなら、せめてその眼は鼻は口附はとたづねていつてもやはり結果は同様であつた。顔の想像がつかなくなると、こんどはその風貌の方へまはつていつた。齢若なのはそれでいい、学識や人格はさう気にもかけなかつた。だが身長はすらりと高いかしら、肩の辷りはどうだらう、まさか猫脊ぢやあるまい、そして脚は、家鴨のやうに短いとをかしなものだと、まるで彫刻家がその制作の構想でもしてゐるやうであつた。手のぽかんとやすんでゐることがたびたびあつた。そのくせ一つのそれらしい形体さへ描きだされず折角やつと描きだしたとおもつても、さうおもふことをやめるがはやいか、すうつときえてなくなるそれは煙の影のやうなものであつた。

障子をすつかり骨ばかりにしてしまふと、初瀬が云つた。

「ちよつと、あんた、これをどうしませう。わたし刷毛なんかもつたこともないんですがね」

高木は、けれど耳も傾けないでせつせと腕を動かしてゐた。さうたいして能筆といふではないが、まあどうやらその性格通りにはかけてゐた。しつかりしてゐた。かいたので畳の上は一ぱいであつた。

「ねえ高木さん」さういひながら女は近づいてきた。「おや、たくさんかけましたね。もうそれでおしまひ？」

「さうです」

女はだまつてながめてゐた。その眼の下で高木はやつとかき上げてしまつた。そして自分のかいたのを、ずらりとそこにひろげられてあるのを、さも満足さうに見わたした。

「こんどくる先生は博士なんですの？」と女がたづねた。

「さうだらうとおもつて、かう書いたんですが……」

この初瀬の質問はなんでもないもののやうであつた。実際、また初瀬にはさうであつた。それに対してつひうかうかと曖昧な返事をしてしまつたけれど、それは高木の鳩尾をどきんと打つた。（さあ、ほんとに博士かしら、もしさうでなかつたとしたら……これはいけない。書きなほす外あるまい。や、たいへんなことになつたな。だが博士だらう。大概あちらの大学をでてくるものは博士だ。さうでないことはあるまい。よしまちがつたにしたところで何でもないさ、まちがひだもの。それはいけない。知つててやつて間違ひといふことがあるか。それにわれわれからして嘘を吐くなんてことがあつていいものか。あとで解つたら何とする。なんといつて社会にわびる。それは公衆

を欺いたことになりはしないか。一体、かうしてびらを貼るのからしておかしなもんだ、まるでかうして人を魚のやうに、釣るやうなもんだ。いかにそれが宣伝のためだとはいへ、一人にでもより多く福音をつたへやうとするためだとはいへ、あんまりだ。いつそ貼るのは廃めてしまはうか。さうすると集会がどうだらう。来る人がないとしたら……自分らはまあどつちだつていいとしても、先生に気の毒だ、それにはじめてではあるし。これはこまつたな！　いやいや、そんなことを云つてゐたんでは伝道なんかできない。嘘も方便といふことがある。博士でなかつたらなかつたでいいさ……。）

「あんた、この障子を張つてくださる？」

それがぷつりと悩ましいしあんの糸をてもなく切つて高木を救つた。

「さうですか。ぢや、私がそれを張りますから、ここへこのインキで赤い円をつけてください」指でそれをぐるぐるとかいて見せて「みんな、かうしてね」

「ええ」

「それはさうと、何時頃でせう」

小さな銀時計が、さうきかれたので、ふつくりした胸と帯とのあひだからその鎖がはりの白茶色のリボンでひきだされた。気持よくそこに眠つてゐたのであつた。

「あら、とまつてるわ」

「あの汽車は五時何分でしたね」

「たしか二十五分だとおもひましたが、おむかへに行くんですか。もうかれこれその時間かもしれません」

「さうなるでせうか。それぢあかうしちあゐられない。あんたも停車場へゆくでせうね」

「私、やめときますわ」

眼と眼がばつたりあつた。

「ではそれを頼みます。私がこんや夜更けてから貼ります。あまりはやくすると悪戯にひつぱがれてしまひますから。それからその障子ですな、それも明日の朝までになんとかします」

ぷいと高木はさういひすてて行つてしまつた、かとおもふと、またひよつこりと階子段のうへに首だけみせた。

「それからね、明日はすこしはやく来てくださいよ」

「ここへ？」

「さうです」

さて、とりのこされたひとりぼつちの初瀬をみるとまたもやなにをおもつたのか、のこのこと空想の奴がやつてきた。しかし、こんどは先生ではなくつて、いましがたまでそこに一しよにゐた高木となつてやつてきた。何か言ひたさうな顔をしてゐたつけが、すぐまたどこへか見えなくなつてしまつた。意識の底にかくれたのだ。

日はもうよほど低くなつたとみえて、真赤な、けれど弱々しい光線がそこらにちらほらこぼれてゐるだけになつた。風もすこし冷たくふきだしてきた。階下の家でも畑からもどつてきたやうだ。話し声がする。土間にはいつてゐた鶏がおひとばされてけたたましく鳴き立てる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com